

あ
く
た

登
場
人
物

男
1

女

男
2

友
人

作・サカイリユリカ

舞台奥、ベッドに気だるげに横たわる男女。

男1は寝そべったままコンドームを手を持ってぶらぶらさせている。

女、ぼんやりとそれを眺めている・・・

男1、ベッドから起き上がるとコンドームの口を器用に縛りゴミ箱へ捨てようとする。

女、現実に戻されたかのように起き上がる。

女 あ、

男1 ん？

女 あ、いや、

男1 なに、

女 なんかもったいないな——って、

男1 (ゴムを女の前に差し出し) じゃあ飲む？

女 ・・それは、

男1 ウーソ

男1、女の頭を軽くぼんぼん叩くとゴミ箱にコンドームを捨てる。

女 ・・・もういつかい

男1 え？

女 なんでも

男1 シャワーあびてくれば

男1、ベッドの中にもぐりこむ。

女 うん

女、ハケる。

男1、ベッドから起き上がり身支度を整え始める。

・・・と、唐突にゴミ箱から先ほどのコンドームを取り出し見つめる。

男1 何やってんだか

男1、ゴミ箱にそれを放り投げると、ベッドのシートに手を擦りつける。

男1、部屋を振りかえることもなくでていく。
徐々に夜に向かって、暗く沈んでいく空間。
既に身支度を整えた女、歩いてくる。

ビニール袋からゆっくりと傘を引き抜く。

女、袋の底にたまった水をみようとしますが、興味がうせたようにビニールの口を縛る。

傘を少し左右に振って水滴を落とし、傘をさす。

片手に袋を持ってぶらぶら無意識に揺らしながら、歩いていく。

女
ゴミ箱ないかなあ

女、電話をかけ始める。

女
あ、もしも・

声
おかけになった電話番号は、現在使われておりません

女
・・・ですよ

声
おかけになった電

女、ボタンを押して携帯を切る。
静かに歩きます。

薄暗い空間が少しずつ照らし出される。

部屋の輪郭がはっきりしてくる。

テーブルに用意された1人分の食事。

あたためられたばかりなのか、湯気が立っている。
手をつけようとする女。

男2
食わないのか

女
うん

男2
まだなんだろう

女
うん でもいいよ食べて

男2
いや 俺はもう

女 そうだよね ごめん

男2 少しもいらぬ

女 (箸を手に取るものの、もてあましている)

男2、立ち上がって柵からラップを持ってくる。料理にラップをかけようとする。

女 なにするの

男2 いたんじゃうと思わない？

女 え

男2 だからさ、

女 ああ

男2 いたむでしよ、まずくない

女 ああ、まずくなるとは思うけど・・・

男2 ほら、(ラップをかけようとする)

女 待つて

男2 (気にせずラップをかける)

女 だから待つて

男2 食べないんだろ

女 待つてつて言ったでしよ

男2 ……

男、立ち止まる。

女 ごめん もう少ししたら食べるから

男2皿をテーブルに置きなおす。

男2 今食べたら

女 今じゃなくてもいいかな

間。

男2 ああ、猫舌だったっけ

女 え

男2 今度から気をつけるよ

女 いや、別に私は

男2 (きえぎるように) おやすみ

女 あ

男2 おやすみ

男2 去る。

女、しばらく呆然と座り込んでいる。

友人がやってくる。隣り合って座っている。

友人 ないの、なんかほら、積もる話っていうか

女 なにそれ、

友人 あるでしょ山ほど

女 そりゃそうだけど、どっから話したらいいのか

友人 やだなあ、何でも話してよ

女 うん、

友人 最近はどう

女 まあ、ぼちぼち

友人 そっか、元気そうで良かった。なんか、忙しいのかなって

女 あーそれほどでも

友人 そ、良かった

女 ありがとう。そっちも、なんかほんと、昔と変わらないね

友人 そう？

うん、よく言われる

女 だるうね。だって変わってないもん。ほんとに

友人 そんなに？いやそっちだって

女 うそ

友人 正直 最初は誰かと思ったけど

女 え？

友人 なんてね だってほら、かなり久しぶりだったし

でも連絡とってみて良かった ありがとね

女 なに急に 気持ち悪いなあ

友人 だってほら、またここにこれるなんて思ってなかったし

女 そうだね ここも・・・まだ残ってるなんてね

友人 まあここはね

女 え

友人 最近ここによくくるんだ あ、みて

女 え

友人 川 なんか水がずいぶん

女 え、ああ・・・最近、雨ふったつけ

友人 いや、たぶんあれだ、上流で雨がさ、

女 ああ、

友人 しかしすごい色してるね

女 うん どうりでくさいわけだ

友人 え

女 だって、そう思わない

友人 ああ・・・もう慣れちゃったかな

女 え

友人 それに今日はそこまでひどくないよ

女 ああ・・・そうなんだ

友人 そうそう それに昔から綺麗なわけでもなかったしねここは

女 そうだったね

友人、その場にあおむけで寝そべる。

友人 あ、

女 どうしたの

友人 いや、なんか、いいにおいしたなって、今
女 え・・ああ、ああ

なんだっけ、これ この、確か前にも

友人 キンモクセイ

女 ああ・・そうそうそれ

友人 好きだなあこれ

女 近くに在るのかな

友人 そうかもね

友人、笑う。

女 え、なにどうしたの

友人 いやちよっと思ひ出してき、

女 え？

友人 覚えてない、ほら、キンモクセイはトイレの香り、って
女 トイレって

友人 ほら、あれ・・いっだったかな 話したことあったじゃない

このにおい、なんだっけって・・一生懸命思ひ出してさあ。で、

「あ、トイレだ！」って、トイレの芳香剤だ、って2人で爆笑したよなあって

女 あったっけ、そんなこと

友人、まだ笑っている。

友人 あったでしょ、いや、あれはおかしかったよねえ

女 芳香剤なの

友人 え

女 いやだから

友人 ああ、昔はね 今は少ないんじゃないかな

ほら、キンモクセイってにおい強いから ああいう、トイレの匂いとかに

よくきくんだよきつと

女 ああ、なるほど

友人 (笑って) 忘れちゃったのかあ

女 それだって何年前の

友人 まあ、もう10年以上たってるか むしろ覚えてる方が不思議だよね

女 記憶力良かったっけ

友人 悪いよ でも最近思い出すんだよね ふとしたときにさ、

ほんとはわいのないことなだけど思い出すの

女 そういもんかな

友人 うん、だからあんたも憶えてはいると思うけど

女 そうだといいいけどね

問。

友人 ちょっと・寒くなってこない

女 ああ、そういえば

友人 いきますか、そろそろ

女 うん、

女 おっちだつて子供が

友人 まあ、まあ

女 早く行ってあげないと

友人 大丈夫だつて みてもらってるし

女 なに言ってるんの、ほらお母さん

友人 はあい

歩き出す2人。

友人 じゃ、またね

友人、ハケる。

女 うん、また・・・

間。

女 また、ねえ・・・。

スクリーンに映し出される、足相撲する男女のシルエット。

女 はじめまして

“ 6月14日午後13時／2007年春／3時間40分8秒／東京都新宿区／オトナ
2名／6300円／“

チェッカーの音が重なる。

女 いきですか

ゆっくりと足と足が絡み合い、指先と指先がつかず離れずの状態を繰り返して
たり、足先で互いの存在を感じ、遊んでいるかのよう。

やがて足の指同士がぎゅっと固く結ばれる。

女 さようなら

やがて、ゆっくりと指先は糸を引くように一つ一つと離れていく。

男2がやってくる。男1、静かに去る。

男2 ただいま

女 ああ、帰ってきてたの

男2 うん

女 いつ さつき？
男2 割と

女 そ、

男2、去ろうとする。

女 あ、待って

男2 なに

女 あのさ、これどうしたの

男2 え

女 なんでこんなことになってるの

女、冷蔵庫の野菜室の透明なフタを静かにあける。
あたりに漂う異臭。

男2 ああ、そのことか

女 くさい

男2 ごめんって、

女 信じらんない

男2 あー・・・

女 なんでほつといたの、こんなになるまで

男2 ほうっておいたわけじゃない

女 生ものは 早いとこ食べなきゃ

男2 食べようとは思ってたよ 今日か明日
腐る直前が一番おいしいらしい

女

女 もう手遅れだけどね

男2 ああ・・・もったいないなあ

女 ・・じゃあ、食べれば？

男2 え

女 ウソだよ（静かに溜め息を吐く）

ほつとくと水みたいになってひどいことになるから 冷蔵庫じゅう水びだし

女、舞台奥へ。

男2 (冷蔵庫をのぞきこみ) あーなんにもないな

ガサガサ音をたてて、透明なビニール袋に乱雑に詰め込まれる腐った果物。
汁が袋の底にたまっていく。

男2、ビニール袋を縛ってゴミ箱へと放る。

続